

沖縄県護国神社社報

うむい五号

特集

学徒たちの沖縄戦

『なごらん学徒隊』



社報「うむい」について

沖繩の言葉で「思い、願望、考え、所存」のことを「ウムイー」といい、戦争で亡くなった人達の思い、そして残された遺族、戦友達の思いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていった先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。



表紙写真（上原マリ子氏撮影）
「なごらんの花」

目次

英霊の言乃葉	3
護国神社この一年	4
特集	
学徒たちの沖繩戦	7
「なごらん学徒隊」	
永代祭申込者御芳名	14
永代祭御供奉納者御芳名	14
（命日の御供料奉納者）	
新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名	15
今に残る激戦の跡	17
社務日誌抄	20
御奉納一覧	21
編集後記	

英霊の言乃葉

“ 民族の誇り ” を胸に

学鷲は一応インテリです。

さう簡単に勝てるなどとは思っていません。

しかし、負けたとしても、そのあとはどうなるのです……

おわかりでせう。

われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながっていますよ。

さう、民族の誇りに……

海軍少佐 西田 高光 命

昭和二十年五月十一日神風特別攻撃隊
「第五筑波隊」隊員として「爆装零戦」
に搭乗、鹿屋基地を出撃、南西諸島洋
上にて戦死
大分県大野郡合川村出身
大分師範学校
海軍第十三期飛行予備学生 二十二歳

上記の言葉は、西田中尉（当時）が出撃二日前の昭和二十年五月九日鹿児島鹿屋の野里村（現在は町）の基地に於て、海軍報道班員・山岡荘八氏の質問「この戦を果して勝抜けると思っているのかどうか？もし負けても悔いはないのか？今回の心境になるまでにどのような心理の波があったか」に対し返答したものである。尚、本年（注）四月二十八日は対日講和条約発効（主権回復）五十周年の節目にあたる。

【平成十四年四月靖國神社社頭掲示】

*注 平成十四年掲示の為、本年は主権回復五十二年にあたる。
尚、来年は終戦六十周年、日露戦争戦勝百周年にあたる。御英霊の生命がその後の日本人の運命につながっている。

護国神社この一年

【第四十五回秋季例大祭】

平成十五年十月二十三日、第四十五回秋季例大祭が御遺族、崇敬者約五百人の参列のもと厳粛に斎行された。定刻の午後一時、大祭開始を知らせる太鼓の合図とともに祭典が始まり、齋主又吉眞興宮司の祝詞奏上に続き、大祭委員長代理の大城英夫副会長、沖縄県遺族連合会会長座喜味和則氏がそれぞれ祭文を奏上した。



祭典には、靖国神社宮司を始め神本庁統理、日本遺族会会長ほか全国各地から慰霊電報及び祭詞が寄せられた。

【大祓式】・【除夜祭】・【歳旦祭】の斎行

平成十五年十二月三十一日から平成十六年一月一日にかけて、「大祓



式」・【除夜祭】・【歳旦祭】が斎行され、新しい年に向けての祈願が行われた。

また、御社殿前に設けられた特設スタジオから、恒例の民放ラジオの生放送が行われた。

今年は好天にも恵まれ、本神社始まって以来の多数の参拝者で賑わった。

【奉幣奉告祭】

天皇皇后両陛下には「国立劇場おきなわ開場記念公演」への親臨や県内事情御視察の為、平成十六年一月二十三日から二十六日まで沖縄県に行幸啓された。二十三日には神社前国道御通過に際し、沿道の多数の県民と共に御奉迎申し上げ、夕刻よりはハーバービューホテルにて待従より宮司へ天皇皇后両陛下よりの幣饌料が伝達された。夜には国際通りに行われた奉迎提灯行列に神社役職

員も参加し、参加者約二千名と共に両陛下をお迎えした。又、二十四日には宮古島へ御移動の為、空港へ向かわれる両陛下を神社前国道にて多数の県民と共に御送迎申し上げた。両陛下より幣饌料賜るにより、二月十日に奉幣奉告祭が役員多数参列のもと厳粛に斎行された。



【第四十六回春季例大祭】

平成十六年四月二十三日、第四十六回「春季例大祭」が斎行された。秋季同様、約五百人の遺族、崇敬者

が参列し厳粛に祭祀が執り行われた。

祭典では、裏千家淡交会沖縄支部よりお茶の奉納が行われ、また航空自衛隊那覇基地太鼓部による奉納太鼓も行われた。



【戦没者総合慰霊祭】

平成十六年六月二十三日（慰霊の日）、戦没者総合慰霊祭が斎行された。正午の時報に合わせて黙祷がさげられ、御遺族多数が列席する中、

齋主又吉眞興宮司のもと祭典が厳粛に執り行われた。



【殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）】

平成十六年八月十五日正午より、神社、英霊にこたえる会沖縄県本部、沖縄県遺族会共催による「みたま祭り」が斎行された。黙祷・国歌斉唱の後、齋主又吉眞興宮司による祝詞奏上、英霊にこたえる会沖縄県本部会長野澤章悟氏の祭文奏上が行われ、最後に、本年より当神社代表役員に就任した沖縄県遺族会座喜味和則会長よりご挨拶申し上げた。

本年みたま祭りは御遺族・各地区遺族会を始め、沖縄県郷友会・沖縄海友会・沖縄県傷痍軍人会などの関

第4回「沖縄県立第三高等女学校」

—なごらん学徒隊—



特集

学徒たちの沖縄戦

●学徒隊について

沖縄戦では正規の兵隊の他に「ひめゆり学徒隊」「鉄血勤皇隊」に代表される、下は十二、十三歳、上は十八歳からなる旧制中学、師範、高等女学校在学中の男女学徒が動員され、最前線で通信、観測、看護等の任務につき、その多くが犠牲となった。

ここでは「学徒たちの沖縄戦」と題して、各学校ごとに若くして散っていた男女学徒たちの足跡をたどり、彼らがどのような「思い」をもって戦場へ赴き、どのような体験をしたのかをたどり、亡くなった学徒たちに鎮魂の誠を捧げたい。

係各団体はもとよりながら、那覇商工会議所会頭様・沖縄瓦斯株式会社会長様その他経済界よりも御参列戴き、また自衛隊各部隊よりの御代表の方々も参列され、盛大、厳粛に祭典が執り行われた。



《これからの予定》

- ・平成十六年十月二十三日
「第四十六回秋季例大祭」
- ・平成十六年十一月十五日
「七五三祭」
(十一月中受け付け)
- ・平成十六年十一月二十三日
「新嘗祭」
- ・平成十六年十二月三十一日
「大祓式」・「除夜祭」
- ・平成十七年一月一日
「歳旦祭」
- ・平成十七年一月三日
「元始祭」
- ・平成十七年四月二十三日
「第四十七回春季例大祭」
- ・平成十七年六月二十三日
「戦没者総合慰霊祭」
- ・平成十七年八月十五日
「殉国英霊顕彰祭(みたま祭り)」

永代祭祀のご案内

当神社では、春・秋の例大祭を始め六月二十三日の戦没者総合慰霊祭、八月十五日の殉国英霊顕彰祭(みたま祭り)等種々の祭典を御奉仕し、戦争によって散華されたみたまをお慰め申し上げております。

また、各々の戦没者の御命日には神前にて永代命日祭を斎行致しております。

この永代命日祭は、御遺族からのお申し出により斎行されるもので、当神社では、沖縄県出身の戦没軍人・軍属並びに一般住民を始め、沖縄戦にて散華された本土出身戦没者の御遺族方からの永代祭祀申込を受け付けております。

永代祭申込み後は、御遺族へ前もって御案内申し上げ、命日に祝詞を奏上し、御祭神の慰霊安鎮と御遺族の御繁栄を祈念致します。(御参列が無くても斎行致します。)

なお、永代祭申込み初穂料は二万円以上となっております。詳しくは、当社社務所(電話〇九八―八五七―二七九八)までお問い合わせ下さい。

●沖縄県立第三高等女学校の沿革
 沖縄県立第三高等女学校は大正九年四月七日に国頭郡各村組合立実科女学校として設立された。当時は職員五名、生徒八十五名が在籍し、一般科目のほか、機織、染色、裁縫、農業などの実業科目が教えられた。

大正十三年四月国頭高等女学校と改称し、昭和五年三月県に移管され沖縄県立第三高等女学校となった。

昭和十年本科と実科の二学級編成となり、昭和十四年実科生が本科へ編入された。昭和十六年以降徐々に戦時色が強まると、制服がヘチマ袴の上着とタイトスカートに変わり、英語科の廃止、授業科目に救護法、手旗信号、竹槍訓練等が加わっていた。昭和十九年に入ると校舎は守備隊の寄宿舎として使用され、沖縄戦突入後は十名の生徒がなごらん学徒隊として従軍した。

現在もとの敷地は県立北部病院となっており、病院裏手の坂が旧校門としての面影を残すのみである。

なごらん学徒隊

なごらん学徒隊は、沖縄県立第三高等女学校四年生十名で編成された学徒隊で、校章に描かれた沖縄本島北部の名花にちなんで「なごらん学徒隊」と呼ばれた。



沖縄県立第三高等女学校校章

昭和十九年に入ると戦局は日に悪化し、那覇から遠く離れた名護の地にも戦争の波が押寄せ、現地の女学生達も食料増産農作業、防空壕造りなどに狩り出された。また昭和十九年卒業生十一名は、卒業式を目前に三月三日本土の軍需工場へ徴用されていた。更に学校校舎は北部地域守備隊

である独立混成第四十四旅団（鈴木繁二少将）の駐屯地として使用され、通常の授業はほとんど行われなくなっていた。

同年五月、名護警察署からの要請で、名護町内に住む三高女生徒三、四年生によって「地域防衛補助隊」が結成され、警報が出たら警察署の防空壕で待機することとなった。同年十月十日、いわゆる十空襲が名護の町にも襲いかかり、名護湾に停泊していた日本軍の船舶が空爆をうけ火の海となった。燃え盛る海面から小船に乗せられてくる負傷兵の搬送を地域防衛補助隊である三高女の生徒たちも手伝い、現場では目鼻の区別のつかない丸焦げの人、手を掛けるとツルツと皮膚がむける負傷兵など、顔をそむけたくなるような状況のなか必死に救助に励んだのであった。

昭和二十年一月二十八日、北部地区の守備にあたっている独立混成第四十四旅団の第二歩兵隊（宇土武彦大佐）の要請により、八重岳の野戦病院へ三高女生徒十人が看護実習生として派遣された。そこでは看護の目的、人体組織などの専門教育のほか、陸軍病院服務、忠節五ヶ条など軍隊としての教育も受けながら二十日余り看護実習が行われた。実習中は頭をすっぽり包帯で巻かれた傷兵、手足が切断された重傷の兵士など痛ましい姿の兵士達の看護にもあたり、彼らのために甲斐甲斐しく奉仕する乙女達の姿があった。そして、第一次派遣隊の後、三月二日に第二次派遣隊十名が派遣され、第一次派遣隊と同様苦しく、厳しい実習が行われ、合計二十名の女子学徒達が従軍看護婦としての教育を修了した。

昭和二十年三月二十四日、いよいよ米軍の上陸が確実にとなると看護教育を修了した女子学徒の中から安里信子、大湾通子、大城キヨ、渡慶次悦子、岸本敏子、屋部節子、糸数米子、仲村渠富子、座覇愛子、玉城千代が指名され、従軍看護婦の一員として任用されることとなった。一行は軍が用意したトラックに乗り、晴れやかな気持ちで八重岳へと向かっていった。翌朝渡口精一軍医を隊長とする沖縄陸軍病院名護分院（野戦病院）に配属され、早速活動が開始された。この名護分院は



当時の名護分院の様子（画・上原米子氏）



名護分院の建物跡地

軍医二名、衛生兵十五名、看護婦十名（学徒生十名を含む）で構成され、兵舎一棟、病棟三棟、治療棟一棟、医務室一棟があり、約七十人の負傷兵の収容能力があった。四月一日、米軍が本島中部に上陸し、その後徐々に本島北部へも侵攻し、ついに九日には北部守備隊と交戦状態に突入した。戦闘に入ると負傷者が続々と野戦病院へ運ばれ、病棟のみでは足らず兵舎も病棟として使用され、衛生兵や看護婦は手掘りの壕へ移り、敷物もない冷たい土の上で仮眠を取りながら負傷兵達の看



今も残る手堀の壕（ここで仮眠を取った）

護にあたった。他にも学徒たちは食事の運搬、包帯の洗濯なども行い昼夜問わず働きつづけたのであった。

それらの仕事の中で特に大変だったのは手術時の照明係りであった。それは木箱にローソクを立て、それを術部にあてる係りで、嫌が上でも術部を見ることになり、麻酔なしの過酷な手術に立ち会うことは熟練の衛生兵さえも嫌がる仕事であった。しかし学徒たちは、負傷兵のために必死で従事したのであった。

四月十六日、部隊本部より転進命令が発せられ、歩行可能な兵士とともに学徒たちも転進先である多野岳（名護市北方）へと向かった。

しかし、米軍の砲撃により無事たどり着くのは困難で、途中多くの兵士や仲間が負傷していった。そこでも学徒たちは自らも負傷しているにもかかわらず、必死で応急処置に励

んだのであった。しかし、この砲撃によって学徒の一人である安里信子がついに帰らぬ人となったのであった。

一行は、昼は山に隠れ夜になって歩き、途中多くの人をばらばらになりながらも、何とか多野岳に辿り着いた。しかし、すぐに解散命令が出て、砲火のなか学徒たちはそれぞれ家族がいると考えられる方向へと歩き、家族の下へと帰っていった。

現在、三高女の後継である沖縄県立名護高等学校敷地内に「南燈慰霊之碑」が建立され、なごらん学徒として散華された安里信子のほか、満州事変以後散華された三高女学徒並びに卒業生三十五柱と、同じく散華された県立第三中学校の男子学徒並びに卒業生三二九柱が同碑に祀られている。

学徒看護隊の手記



上原 米子
（旧姓 糸数）
内間 通子
（旧姓 大湾）

四月九日（上原米子）

上陸してきた米軍と宇土守備隊との死闘が続いた。本部港沖の米戦艦の砲撃も激しくなり、日が暮れると負傷兵が続々と運び込まれた。病室が満員になると担架のまま外に並べられ、治療室に行く前に息絶える兵もいた。衛生兵も看護婦も学生も不眠不休の治療と看護に没頭した。病棟は、血の臭いや悪臭が漂っていた。

戦況が熾烈を極めるにつれ兵士たちの心も不安定になり、高射砲を有しながら応戦の命令が出ないことに業を煮やして、酒の勢いで部隊長に

抗議しようと手榴弾を持って押しつけてきた兵長がいた。それを聞きつけた中尉が袈裟懸けに切りつけるという事件も起きた。

四月十六日（上原米子）

夕方、宇土部隊本部より「病院の者は、独自の行動で羽地を突破し、多野岳に転進せよ」との命令を受けた。その時、歩行不能な負傷兵に手榴弾と乾パンの袋を配った。

置き去りにされることを察知したのか「看護婦さん何処へ行くんですか。」と尋ねられたが、私達には何も知らされていなかったので答えようがなかった。

最後の病棟を出た時、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめかえりみはせじ」の合唱が聞こえてきた。後ろ髪を引かれる思いで壕に帰っていったが、

仲間は一人もいなかった。

私と大湾通子と二人は、くたくたになった体を横にして寝てしまった。そこへ衛生兵が来て、八重岳を撤退することを知らされた。その兵の後をついて行くと、下の本部近くの道路に病院の仲間と独歩患者が列をつくって並んでいた。はぐれないようにと前の人のリュックに結ばれたハンカチをつかみ、数珠つなぎの状態で出発した。

足場の悪い山道の闇の中、敵兵に気づかれないように、地雷が敷設されているかも知れないので踏まないようにと気を配りながら、抜き足差し足で歩いた。途中から子連れの民間人もついてきていた。

四月十七日（内間通子）

伊豆味のミジントーという山の中腹にさしかかったとき、しらじらと

夜が明けてきた。「日中は進めないで、日が暮れるまで山中に待機しておけ。」と隊長に言われ、山中でじっとしていた。夜が明けると米軍の偵察機が飛び交い始めた。疲労でうとうとしていたときだった。いきなり、すさまじい炸裂音が響いたかと思うと物凄い爆風、土砂煙、鉄の破片が降ってきた。私は、土砂を被り大きな岩石もろとも吹っ飛ばされ、窪地に転げ落ちて意識を失った。暫くして気が付き、体を調べてみるとどこも怪我は無かった。

四月十七日（上原米子）

山中に砲弾がところ構わず飛んでくる。多くの仲間が砲弾を受けて無残に命を落としていった。看護婦や学徒たちは、その場で応急処置を行った。

私も右足に弾の破片がくい込んで



八重岳頂上より本部方面を望む（中腹に野戦病院があった）

いた。応急処置も一応終わったので、皆は急いで安全地帯を求めて進んでいった。歩けない私と一緒に学友の大湾通子、仲村渠富子がついて、負傷していた比嘉信子看護婦、傷病兵五人がそこに留まった。米軍は既に山麓に迫撃砲陣地を構えていて、米兵の話し声が聞こえ、前進も退却も困難な状態で皆は一か所にうずくまっていた。

そこへ衛生班長が来て、「もう我々は助からないから一緒に死の

う」と言ったかと思うと、手榴弾の安全弁を抜いて鉄かぶとに叩きつけようとした。その危機一髪の時、仲村渠富子が「班長！そんなに死にたかつたら一人でどこかへ行行って死んでください！」と言って班長から手榴弾をうばった。

先に進んで行った看護婦の花城さんが戻ってきて、私に「おぶってやるから一緒に行こう。」と言った。私はおぶられて二、三メートルほど進んだが、あお向けに倒れている兵、吹っ飛んできた頭を見て先に進む気になれず降ろしてもらった。しばらくして砲弾が花城さんの行く先に落ちた。花城さんは即死だった。

太陽が沈み迎りが暗くなると、砲弾は止み不気味なほど静かになった。私達は何処へ進んでいいか途方にくれていた。その時、上の方から銃を構えた兵が降りてきた。敵の斥

候かもしれないので、私達は思わず手榴弾を握りしめていた。その気配に気づいたのか、相手が「山」と言った。私達はすかさず「川」と答えた。その兵は残された人を探しに来たのであった。私達は、その兵の後をついて屍をまたぎ、山腹を横へ横へと這って移動し、やっと谷間に辿り着くことができた。そこには、病院の仲間や防衛隊員、負傷兵など大勢が集まっていた。深夜にそこから再び移動を開始した。

私は学友二人に両脇を抱えられたり、四つん這いになったりして必死で後を追った。土地勘の無い集団だったので、同じ所をぐるぐる回っている状態でうまく前進できない。いらした兵隊が銃を向け、「女は邪魔だ。ついて来ると撃つぞ。」と脅した。幸いに仲間の班長がかばってくれて難を逃れた。しかし、その班



山の中を転進する生徒たち（画・上原米子氏）

長もいつのまにか私達からはなれてしまっていた。

竹藪を突っ切ると民家の焼け跡に出た。そこを通り過ぎ墓地に着いた。そこは伊豆味の石水という集落だった。さすがに皆は疲れていて墓地の庭で一休み。私は、これ以上この集団と行動を共にすることはできないと思ひ、どうせ死ぬなら墓の中の方

がいいと考えて、防衛隊の方に頼んで墓を開けてもらい中に入った。

学友二人と比嘉看護婦、負傷兵、後から防衛隊員と本土出身の兵隊が入ってきて心強くなった。落ち着きを取り戻すと、喉の渇きがひどくなった。兵隊に水を汲んできて欲しいと頼んだが入れ物が無い。仕方がないので、骨壺のふたに汲んできてもらい皆で奪い合うようにして飲んだ。喉の渇きもおさまり、皆眠ることになった。ふと息苦しさで目が覚めた。狭いところに七人が入っているので酸欠状態になっていたのである。戸口を少し開け、かわるがわる深呼吸をした。いつ敵兵が来るかわからないので戸口を全部開けることはできなかった。日中は、ちよつとの物音にも敏感になって緊張の連続だった。

その後、近くに自然壕が見つかり

そこへ移った。近くに畑があり、人参、ニンニクなどの野菜を採ってきて生で食べた。まもなく、周りの住人が避難先から帰ってきて小屋を建て生活を始めた。民家の方から、鍋や調味料などを貸してもらい、やっと人間らしい食事をする事ができた。

いつの間にか砲弾の音が聞こえなくなっていたが、一日一日が無為に過ぎた。一月ほど経って、看護隊員が避難していることが家族に伝わり、迎えにきてそれぞれ帰っていった。



戦下の学園記から

永代祭申込者御芳名

(平成十五年九月一日〜平成十六年八月三十一日)

- ・佐賀県杵島郡 平川忠雄様
- ・三重県鳥羽市 山分四郎様
- ・高知県中村市 市川敏治様
- ・北海道札幌市 長野洋子様
- ・東京都調布市 米沢 務様

永代祭御供奉納者御芳名(重複掲載有り)

(平成十五年九月一日〜平成十六年八月三十一日)

- ・沖縄県浦添市 濱松 昭様
- ・愛知県小牧市 橋本かや様
- ・沖縄県那覇市 仲村致慶様
- ・広島県呉市 渡部妙子様
- ・愛知県刈谷市 丹村要二様
- ・沖縄県那覇市 高江洲愛子様
- ・岐阜県益田郡 熊崎つや様
- ・岐阜県羽島郡 岩田まさ様
- ・北海道札幌市 浅田興屋様
- ・北海道釧路市 鈴木武夫様
- ・高知県南国市 西原隆稜様
- ・高知県南国市 川村百美子様
- ・沖縄県那覇市 高江洲愛子様
- ・北海道札幌市 土橋慶子様
- ・北海道札幌市 秋満純一様
- ・北海道札幌市 絹川昇悦様
- ・北海道札幌市 鶴原正規様
- ・山口県宇部市 平原清恵様
- ・北海道余市町 木村シズ子様
- ・北海道足寄郡 大竹口重幸様

- ・沖縄県那覇市 与儀シゲ様
- ・沖縄県那覇市 屋良朝正様
- ・北海道古宇郡 澤田政枝様
- ・愛知県一宮市 原 江つ様
- ・神奈川県横浜市 久保井淑子様
- ・愛知県犬山市 吉野幸雄様
- ・北海道札幌市 鳴海美栄子様
- ・岐阜県美濃市 額信信義様
- ・三重県桑名郡 伊藤さみ様
- ・北海道札幌市 工藤イク様
- ・北海道札幌市 櫻井朋子様
- ・愛知県南設楽郡 石野子里様
- ・岩手県盛岡市 瀬川 淳様
- ・岐阜県岐阜市 江崎明美様
- ・山口県宇部市 上田 喬様
- ・大分県玖珠郡 中島美千代様
- ・北海道函館市 伊藤和子様
- ・奈良県天理市 切田京子様
- ・岩手県花巻市 瀬川タエ様
- ・愛知県豊橋市 杉浦文子様
- ・福岡県大牟田市 小柳昌敏様
- ・山梨県甲府市 佐藤ひでの様
- ・神奈川県横浜市 松本敬子様
- ・神奈川県横浜市 高津菊枝様
- ・徳島県阿南市 幸田かね様
- ・熊本県山鹿市 岡部ハツ子様
- ・東京都八王子市 石上順子様
- ・愛知県豊橋市 牧 清様
- ・沖縄県那覇市 仲村致慶様
- ・沖縄県石垣市 瀬名波長宏様

- ・愛知県豊橋市 小野すみえ様
- ・岡山県津山市 石川好藏様
- ・神奈川県横浜市 山本太一郎様
- ・茨城県取手市 大塚幸男様
- ・愛知県中核市 加藤志ず様
- ・北海道札幌市 鳴海美栄子様
- ・徳島県徳島市 田中静子様
- ・佐賀県三養基郡 立石博義様
- ・愛知県名古屋 近藤義文様
- ・北海道苫前郡 土田千代様
- ・北海道札幌市 北村孝子様
- ・石川県小松市 南出春子様
- ・神奈川県藤沢市 辻 功様
- ・東京都荒川区 川俣雄弘様
- ・熊本市 松尾雪子様
- ・静岡県焼津市 松田まさ様
- ・岐阜県恵那郡 岡山孝平様
- ・北海道札幌市 植松 香様
- ・兵庫県津名郡 荒川文子様
- ・北海道斜里郡 朝倉三省様
- ・東京都江戸川区 岡田昌久様
- ・広島県広島市 児玉光晴様
- ・東京都中野区 佐々木禎助様
- ・愛知県岡崎市 内藤はる子様
- ・宮城県黒川郡 菅原秀子様
- ・愛知県稲沢市 川口日出様
- ・神奈川県横浜市 黒木正敏様
- ・北海道茅部郡 佐藤武司様
- ・北海道網走郡 成田静子様
- ・北海道札幌市 川上ふさゑ様

- ・北海道江別市 田村芳子様
- ・神奈川県横浜市 高津菊枝様
- ・和歌山県那賀郡 藤川嘉寿子様
- ・福岡県柳川市 中川小夜子様
- ・北海道札幌市 加藤 勤様
- ・北海道札幌市 宿谷長次様
- ・滋賀県甲賀郡 小島勤二様
- ・熊本県上天草郡 渡辺三郎様
- ・東京都武蔵村山市 十良沢義治様
- ・北海道北見市 与那覇文子様
- ・沖縄県那覇市 阿部辰巳様
- ・北海道上川郡 恵 親也様
- ・大阪府堺市 松永修巳様
- ・千葉市川市 気田一郎様
- ・愛知県海部郡 村井重男様
- ・三重県伊勢市 村上義雄様
- ・北海道川上郡 小坂シゲ様
- ・静岡県榛原郡 加藤恵一様
- ・愛知県稲沢市 下田方子様
- ・青森県弘前市 下山和子様
- ・広島県安芸郡 高橋正明様
- ・京都府八幡市 齊藤金蔵様
- ・沖縄県浦添市 濱松 昭様
- ・滋賀県栗太郡 堀池四郎様
- ・沖縄県那覇市 平田貞子様
- ・沖縄県那覇市 野阪重信様
- ・福井県福井市 川田江勇様
- ・群馬県高崎市 深町フジノ様
- ・沖縄県中城村 宮平オトメ様

新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名

(平成十五年九月一日から平成十六年八月末日までの御奉納者)

- 金百萬元
 - ・愛知県豊橋市 牧 清様
- 金参拾萬元
 - ・福井県福井市 野阪重信様
- 金拾萬元
 - ・福井県坂井郡 鮎 文子様
- 金五万円
 - ・横浜市南区 (累計七万円) 山本太一郎様
 - ・那覇市天久 (累計六万円) 与儀シゲ様
 - ・福井県南条郡 (累計六万円) 上山ヨシヲ様
 - ・北海道空知郡 橋谷 勉様
- 金参万円
 - ・宜野湾市普天間 国際商事 平良 元様
 - ・那覇市若狭 (宗) 阿含宗沖縄道場様
 - ・佐賀県杵島郡 千綿ミエ様
 - ・函館市松陰 伊藤和子様
 - ・(累計参拾万円) 高柳潔子様
 - ・愛知県西春日井郡 (累計四万円) 浅田興屋様
 - ・札幌市西区

- 金貳拾萬元
 - ・熊本市本渡市 大野康孝様
 - ・岩手県下閉伊郡 佐々木フユ様
 - ・群馬県北群馬郡 空の特幹長岡会
- 金拾萬元
 - ・札幌市厚別区 鶴原正規様
 - ・札幌市厚別区 (累計四万円) 井上十重子様
 - ・札幌市南区 (累計四万円) 神谷操子様
 - ・那覇市三原 (累計四万円) 高江洲愛子様
 - ・静岡県藤枝市 西澤功子様
- 金壹万円
 - ・北海道樺戸郡 (累計参万円) 井上瑾子様
 - ・札幌市中央区 (累計貳万円) 佐々木栄様
 - ・東京都八王子市 (累計貳万円) 吉永義尊様
 - ・千葉県山武郡 千葉県沖縄戦友会
 - ・那覇市銘苅 吉井 静様
 - ・北海道登別市 渡嘉敷直幸様
 - ・札幌市清田区 河野光雄様
 - ・北海道岩見沢市 鎌田與季様
 - ・北海道千歳市 佐藤良治様
 - ・北海道樺戸郡 田中幸作様
 - ・北海道登別市 林孝太郎様
 - ・北海道樺戸郡 安田麻夫様
 - ・北海道静内郡 渡邊春雄様
 - ・北海道静内郡 島瀬キクエ様

謹告 新参集殿御造営の延期について

平素は当社社に對しまして、種々のご理解、ご協力を賜わり厚く御礼申し上げます。

さて、当社社では、御創建七十周年記念事業と致しまして、狭小、老朽化しました現在の社務所、参集殿、倉庫をひとつの建物として集約し、ご高齢となられたご遺族、戦友の方々が安心して参拜できる新参集殿御造営を計画致し、これまでに多くの方々からご鄭重なるご芳志をお寄せいただいておりますが、全国的に深刻な経済状況のなか、目標としておりましたご奉賛金額には遠く及ばず、予定の期日でありませす平成十七年十月の竣工は困難な情勢となつてまいりました。

つきましては、新参集殿御造営計画を五年間延期し平成二十二年十月の竣工を目標に、引き続き奉賛金の募集を二期に分けて募ることに致しました。

まず第一期募集（平成十三年十月から平成十九年三月まで）は二千万円を目標に主にご遺族、戦友の方々へご奉納を募ることと致し、第二期募集（平成十九年四月から平成二十二年十月まで）は三千万円を目標に県内外の企業、団体、一般崇敬者の方々へご奉納を募ることと致しました。

これまでご奉納いただきましたご遺族、戦友の方々をはじめ、多くの皆様方には誠に申し訳ございませんが、今後も当初の計画であります「ご遺族、戦友の方々並びに一般の方々の方が安心して参拜できるための施設」造りを目標に、役職員一同取り組んで行く所存でございます。

何卒ご理解いただき、これまで同様のご支援、ご協力を賜ります様お願い申し上げます、新参集殿御造営計画延期についてお詫び申し上げます。

各位殿

沖繩県護国神社 宮司 又吉 眞典

今に残る沖繩戦跡

〔第三十二軍司令部壕と
周辺戦跡〕

現在首里城公園として整備され、国指定史跡であり世界遺産にも登録



首里遠影この地下に壕があった

されている首里城の地下には、沖繩方面守備隊である第三十二軍司令部壕が築かれ、戦争中はこの地を中心に攻防戦が繰り広げられた。今もその周辺には砲撃等によって崩れたトーチカなどの戦争遺跡が残されており、当時の様子を留めている。当初この地域は、第三十二軍所属

第九師団（武部隊）が同地域内にあつた。沖繩師範学校（首里城の横、現在の県立芸大敷地）を徴用し師団司令部として使用していた。しかし同師団の台湾移動により真和志村松川



今も残る沖繩師範学校正門跡

（現松川団地）の国立蚕糸試験場に駐屯していた第三十二軍司令部が移動し指令本部として使用するようになった。

昭和十九年、第三十二軍司令部（司令官牛島満中将、参謀長長勇中将、高級参謀八原博道大佐）は首里城の地下西側部分を戦闘指令部壕として使用することとし、同年十二月より掘削工事が開始された。壕の構築には専門部隊である第二野戦築城隊があたり、作業には沖繩師範学校の生徒や県立一中の生徒、そして地域住民多数が動員され、昼夜を問わず突貫工事が行われ、わずか三ヶ月ほどで地下三十メートル総延長千数百メートルに達する大地下壕が完成したのであつた。

この壕は首里城の地下を南北に貫通する形で構築されており、内部は丸太で補強され一トン爆弾や四トンチ艦砲弾にも耐えうる構造になっていた。壕は五つの坑道で結ばれ、それぞれ坑口は一ヶ所づつあつた。第一坑道の坑口は園比屋武御嶽石門

のすぐ東側、第二、第三坑道の坑口は守札門横の斜面にあり、第四、第五坑道は首里城の南側に構築され、坑口はそれぞれ南側斜面に開口していた。現在それらの坑口は公共工事や宅地開発によって失われ、唯一第五坑口のみ残っている。



現在唯一残る第5坑口

昭和二十年三月二十九日、第三十二軍は司令部をこれまでの沖繩師範学校から完成した地下壕へと移し、これから迎える対米戦へと備えた。壕内は司令部室、参謀長室、参謀室、作戦室、無線室、医務室の他に

寝室、浴室、炊事室などもあり、主な部屋には電線が敷設され四六時中電灯が輝き、司令官以下千名余の将兵と炊事等の女性が居住していた。昭和二十年四月一日、いよいよ米軍が沖繩本島へ上陸し首里の第三十二軍司令部壕内は緊張に包まれた。壕の通信室にはぞくぞくと米軍の動向が伝えられていった。部隊によって砲撃等を要請する隊もあったが、司令部は一貫して持久戦を展開していった。



第32軍司令部首里洞窟配置図



爆撃によって破壊したトーチカ

四月のある日の夕暮れ、首里城南殿近くに砲撃が加えられ、首里城内建物が次々に焼失していった。その後も米軍は艦砲や空爆によって地下司令部壕のある首里城周辺に猛烈な爆撃を繰り返す行い、地表にあるものはすべて破壊され、首里城周辺は白い岩肌がむき出しになった廢墟の丘へと変貌していったのであった。

しかし、地下の司令部壕はほとんど無傷の状態、次々に前戦へと司令を出し続けていった。その後米軍は司令部がある首里をめぐり南下を続け、守備軍もそれを阻止すべく敢然と戦い、両軍の間で一進一退の激しい地上戦が繰り広げられた。しかし、圧倒的な物量を誇る米軍は日本軍を徐々に追い詰め、第一防衛線である牧港、嘉数、我如古、南上原、和宇慶を結ぶ線が四月二十四日に、第二防衛線である城間、屋富祖、伊祖、仲間、安波茶、前田、



首里城入口近くに残るトーチカ跡

幸知、翁長、小波津、小那覇を結ぶ線が五月九日に、第三防衛線である仲西、安謝、安里、末吉、平良、石嶺、弁ヶ岳、運玉森、我謝を結ぶ線が五月十八日から二十二日ごろにかけて突破された。五月二十二日、第三十二軍司令部は首里から本島南部へ撤退することを決定し、同日移動が開始された。折りしも二十二日から沖繩本島地域は大雨が続き、米軍は空からの視察が出来ず、撤退に気が付いたのは四日後のことであった。守備軍首脳陣は、将兵が無事に南下出来る様約五千の兵士を首里一帯に残し、首里の司令部のほか周辺地域に残存する約三万の将兵が摩文仁、喜屋武、与座、真栄平地区へと移動を開始し六月五日に全軍撤退が完了した。五月二十九日午前十時十五分、米海兵隊第五連隊のA中隊が首里城へ

と突入し、首里の司令部壕は陥落した。その後主戦場は南部へと移り、撤退した各守備隊は地域一帯の鍾乳洞に拠ってなおも抗戦を続けた。しかし、六月十七日国吉、与座岳、真栄平、仲座の最終防衛線が突破され、六月二十三日牛島司令官、長参謀長が摩文仁で自決し、日本軍守備隊である第三十二軍の組織的抵抗は終わった。その後、なお抗戦を続けた部隊もあり、最終的に沖繩での戦闘が終了したのは降伏調印をした九月七日であり、日本の敗戦後のことであった。

※参考文献

- 「戦史叢書 沖繩方面陸軍作戦」
- 一九六八年 防衛庁防衛研修所戦史室 著
- 「日米最後の戦闘」
- 一九六八年 米国防省編 外間 正四郎 訳

御奉納いただきました

〔平成15年9月～平成16年8月〕

寄贈図書

- ・「戦後五〇年記念ブーゲンビル島沖繩県遺族会誌」
ブーゲンビル島沖繩県遺族会沖繩県ブーゲンビル島戦友会著
- ・「ブーゲンビル島沖繩県遺族会理事高良幸太郎氏より」
〔愛知県下英霊社忠魂碑等調査報告書 第三輯〕
愛知県護國神社 編（発行者より）
- ・「第四十七回（社）日本和裁士会九州ブロック沖繩大会」
（社）日本和裁士会九州ブロック 編
- ・「和服裁縫（日本和裁士会五十年史）」
（社）日本和裁士会沖繩県支部より
- ・「創立五十周年記念誌」
沖繩県市遺族会美里支部 編（会長 仲宗根義尚氏より）
- ・「父と母の生きた時代 特攻隊長 伍井芳夫」
白田智子 著（著者より）
- ・「船舶特攻の沖繩戦と捕虜記」
深沢敬次郎 著（著者より）
- ・御奉納品物
・正面幕 (株)ジーマ、ジーマックス
・正月参拝者用御神酒 二樽 (株)ジーマ、ジーマックス
・樽 酒 龍華会
・樽 樹 (福 木)
- ・日本青年遺骨収集团（JYMA）

玉串料御奉納者名（社務日誌抄掲載者以外）

- ・岩手県岩泉町 土田雅彦様
- ・北海道空知郡栗沢町 土田幸大様
- ・北海道磯谷郡蘭越町 橋谷 勉様
- ・長崎県西彼杵郡長与町 下條 司様
- ・長崎県西彼杵郡岡源 今富 均様
- ・長崎県西彼杵郡長与町 今富 勝様
- ・福井県三国町 古立安枝様
- ・福井県今左町 鯛 文子様
- ・三重県津市 上山聖順様
- ・三重県津市 西條ヒナ様
- ・北海道広尾郡 岡田きよ子様
- ・神奈川県 沢井志郎様
- ・沖繩県浦添市 小山田義文様
- ・沖繩県那覇市 稲福マサ様
- ・宮崎県宮崎市 吉川初枝様
- ・長崎県島原市 外竹景子様
- ・長崎県島原市 酒井トミ様
- ・高知県南国市 柿原満子様
- ・北海道斜里町 川村由美子様
- ・北海道斜里町 外竹栄子様
- ・北海道東区北 本田千鶴子様
- ・三重県伊勢市 石田喜四郎様
- ・豊見城市名嘉地 浜田末美様
- ・京都府京都市 松本一恵様
- ・京都府京都市 古賀野親男様
- ・長崎県出島町 井上徳男様・富美子様
- ・長崎県出島町 板木一郎様・他九名
- ・京都府船井郡和知町 元沖繩山三四七五部隊 第二大隊戦友会事務局様
- ・京都府船井郡和知町 中谷梅雄様
- ・京都府船井郡和知町 金城ユキ子様
- ・京都府船井郡和知町 堀 武士様
- ・京都府船井郡和知町 白田智子様
- ・京都府船井郡和知町 沖繩県那覇市 知念範紺様

御奉納ありがとうございました。

社務日誌抄

〔平成十五年九月～平成十六年八月〕

九月	一日	那覇まつり成功祈願祭	二日	那覇まつり成功祈願祭	三日	那覇まつり成功祈願祭	四日	那覇まつり成功祈願祭	五日	那覇まつり成功祈願祭	六日	那覇まつり成功祈願祭	七日	那覇まつり成功祈願祭	八日	那覇まつり成功祈願祭	九日	那覇まつり成功祈願祭	十日	那覇まつり成功祈願祭	十一日	那覇まつり成功祈願祭	十二日	那覇まつり成功祈願祭	十三日	那覇まつり成功祈願祭	十四日	那覇まつり成功祈願祭	十五日	那覇まつり成功祈願祭	十六日	那覇まつり成功祈願祭	十七日	那覇まつり成功祈願祭	十八日	那覇まつり成功祈願祭	十九日	那覇まつり成功祈願祭	二十日	那覇まつり成功祈願祭	二十一日	那覇まつり成功祈願祭	二十二日	那覇まつり成功祈願祭	二十三日	那覇まつり成功祈願祭	二十四日	那覇まつり成功祈願祭	二十五日	那覇まつり成功祈願祭	二十六日	那覇まつり成功祈願祭	二十七日	那覇まつり成功祈願祭	二十八日	那覇まつり成功祈願祭	二十九日	那覇まつり成功祈願祭	三十日	那覇まつり成功祈願祭	三十一日	那覇まつり成功祈願祭
十月	一日	那覇まつり成功祈願祭	二日	那覇まつり成功祈願祭	三日	那覇まつり成功祈願祭	四日	那覇まつり成功祈願祭	五日	那覇まつり成功祈願祭	六日	那覇まつり成功祈願祭	七日	那覇まつり成功祈願祭	八日	那覇まつり成功祈願祭	九日	那覇まつり成功祈願祭	十日	那覇まつり成功祈願祭	十一日	那覇まつり成功祈願祭	十二日	那覇まつり成功祈願祭	十三日	那覇まつり成功祈願祭	十四日	那覇まつり成功祈願祭	十五日	那覇まつり成功祈願祭	十六日	那覇まつり成功祈願祭	十七日	那覇まつり成功祈願祭	十八日	那覇まつり成功祈願祭	十九日	那覇まつり成功祈願祭	二十日	那覇まつり成功祈願祭	二十一日	那覇まつり成功祈願祭	二十二日	那覇まつり成功祈願祭	二十三日	那覇まつり成功祈願祭	二十四日	那覇まつり成功祈願祭	二十五日	那覇まつり成功祈願祭	二十六日	那覇まつり成功祈願祭	二十七日	那覇まつり成功祈願祭	二十八日	那覇まつり成功祈願祭	二十九日	那覇まつり成功祈願祭	三十日	那覇まつり成功祈願祭	三十一日	那覇まつり成功祈願祭
十一月	一日	那覇まつり成功祈願祭	二日	那覇まつり成功祈願祭	三日	那覇まつり成功祈願祭	四日	那覇まつり成功祈願祭	五日	那覇まつり成功祈願祭	六日	那覇まつり成功祈願祭	七日	那覇まつり成功祈願祭	八日	那覇まつり成功祈願祭	九日	那覇まつり成功祈願祭	十日	那覇まつり成功祈願祭	十一日	那覇まつり成功祈願祭	十二日	那覇まつり成功祈願祭	十三日	那覇まつり成功祈願祭	十四日	那覇まつり成功祈願祭	十五日	那覇まつり成功祈願祭	十六日	那覇まつり成功祈願祭	十七日	那覇まつり成功祈願祭	十八日	那覇まつり成功祈願祭	十九日	那覇まつり成功祈願祭	二十日	那覇まつり成功祈願祭	二十一日	那覇まつり成功祈願祭	二十二日	那覇まつり成功祈願祭	二十三日	那覇まつり成功祈願祭	二十四日	那覇まつり成功祈願祭	二十五日	那覇まつり成功祈願祭	二十六日	那覇まつり成功祈願祭	二十七日	那覇まつり成功祈願祭	二十八日	那覇まつり成功祈願祭	二十九日	那覇まつり成功祈願祭	三十日	那覇まつり成功祈願祭	三十一日	那覇まつり成功祈願祭
十二月	一日	那覇まつり成功祈願祭	二日	那覇まつり成功祈願祭	三日	那覇まつり成功祈願祭	四日	那覇まつり成功祈願祭	五日	那覇まつり成功祈願祭	六日	那覇まつり成功祈願祭	七日	那覇まつり成功祈願祭	八日	那覇まつり成功祈願祭	九日	那覇まつり成功祈願祭	十日	那覇まつり成功祈願祭	十一日	那覇まつり成功祈願祭	十二日	那覇まつり成功祈願祭	十三日	那覇まつり成功祈願祭	十四日	那覇まつり成功祈願祭	十五日	那覇まつり成功祈願祭	十六日	那覇まつり成功祈願祭	十七日	那覇まつり成功祈願祭	十八日	那覇まつり成功祈願祭	十九日	那覇まつり成功祈願祭	二十日	那覇まつり成功祈願祭	二十一日	那覇まつり成功祈願祭	二十二日	那覇まつり成功祈願祭	二十三日	那覇まつり成功祈願祭	二十四日	那覇まつり成功祈願祭	二十五日	那覇まつり成功祈願祭	二十六日	那覇まつり成功祈願祭	二十七日	那覇まつり成功祈願祭	二十八日	那覇まつり成功祈願祭	二十九日	那覇まつり成功祈願祭	三十日	那覇まつり成功祈願祭	三十一日	那覇まつり成功祈願祭

（毎月第一日曜日に月例顕彰祭を斎行）

写真で見る護国神社この一年



学生エイサー隊による正月の奉納エイサー



正月元旦の様子



秋季例大祭参列の御遺族

編集後記

・ 沖縄護国神社社報「うむい」第五号をお届け致します。

・ 発刊から早くも五年を迎え、これまで本誌発刊に向けてご協力いただきました方々に心から御礼申し上げます。

・ 特に「特集学徒たちの沖縄戦」の取材にあたりましては、体験者の方々の真に平和を望む気持ちに接し、今更ながら平和の尊さを痛感致しました。

・ 本紙発刊の主旨である、戦争によって亡くなっていった人達、その遺族、戦友等の思いを後世へと伝えていくことを念頭に、これからも年一回発刊していく予定であります。

発行 平成十六年十月一日

発行所 沖縄護国神社

〒900-0026

沖縄県那覇市奥武山町四四番地

TEL 098-857-2798

FAX 098-857-7917

編集担当 加治 順人

印刷所 有うるま印刷